
前川 國男（まえかわくにょ） 略歴

1905 年生まれ。1928 年東京帝国大学工学部建築学科を卒業。卒業と同時にパリへ赴きル・コルビュジエのアトリエで学ぶ。帰国後、レーモンド建築設計事務所を経て、1935 年前川國男建築設計事務所を設立。50 年にわたる建築家としての活動の間に日本建築家協会会長、UIA 副会長などを歴任。日本建築学会大賞、朝日賞、毎日芸術賞、オーギュスト・ペレー賞など多数受賞。代表作には東京文化会館、紀伊国屋書店、京都会館、熊本県立美術館、東京海上ビルほかがある。1986 年 6 月 26 日没。享年 81 歳。

□ 前川國男と世田谷・作品リスト

- 1959 年：世田谷区民会館
- 1960 年：世田谷区役所第一庁舎
- 1964 年：世田谷区立郷土資料館
- 1969 年：世田谷区役所第二庁舎
- 1986 年：世田谷区立郷土資料館 増改築



□ 前川國男と JIA

前川國男は建築家の職能確立のために尽力したことで知られています。旧建築家協会会長や世界建築家連合（UIA）副会長などの要職を歴任したばかりでなく、建築家の精神的な拠りどころとして、大きな存在感を持った建築家でした。（社）日本建築家協会（JIA）は現会長・出江寛で 10 代を数えますが、初代・丹下健三、4 代・鬼頭梓、7 代・大宇根弘司の三名が前川事務所の出身者であることから、その存在の大きさが伺えます。

□ JIA 世田谷地域会とは

（社）日本建築家協会（JIA）は、1987 年に、旧日本建築家協会（1958-）と日本設計監理協会連合会（1975-）が合併して発足した、建築の設計監理業務を行う「建築家」による、日本で唯一の職能団体です。JIA は全国に 10 の支部を擁しており、支部の下に「地域会」が組織されています。私共「JIA 世田谷地域会」は、関東甲信越支部の地域会として、2006 年に発足しました。小学校における空間ワークショップの実施など、地域と建築を繋げる活動を展開しています。

前川國男から見えてくるもの

まつくまひろし
松隈洋

おそらく、建築家・前川國男の名を知る人は少ないと思う。そうした中、二〇〇五年十二月二十三日から、東京ステーションギャラリーを皮切りに、展覧会「モダニズムの先駆者―生涯一〇〇年・前川國男建築展」がスタートした。ここでは、その企画に携わった立場から前川のことを紹介したい。

前川國男は、日露戦争最中の一九〇五年五月十四日に新潟で生まれた。一九二八年、東京帝国大学建築学科を卒業したその日の夜に、シベリア鉄道経由でパリへと旅立ち、二〇世紀の最も重要な建築家といわれる、ル・コルビュジエのアトリエに学んでいる。そして、一九三〇年に帰国し、「帝国ホテル」を設計したフランク・ロイド・ライトの弟子である、アントニン・レーモンドの事務所を経て一九三五年に独立。以後、半世紀にわたる活動の中で、「東京文化会館」や「東京海上ビル」、「熊本県立美術館」など二〇〇以上の建築を手がけ、戦前戦後の日本近代建築をリードした建築家だった。

こう書くと、あるいは順風満帆なエリート建築家の一生に思えるかもしれない。しかし、四歳からは東京で育ち、一九八六年に八十一歳で没するその生涯が、ちょうど一九四五年で二分されていることを考えると、未だ不安定な職業に過ぎなかった在野の一建築家として歩んだ前川の道程は、けっして平坦ではなかったことが容易に想像できると思う。それは、日本が戦争へと突き進む中で、一九二三年の関東大震災と東京大空襲による二度にわたる都市の壊滅を経験した前半生と、焦土から復興していく混乱した状況の中で、建築と都市のあり方を考え続けた後半生からなる、激しい時代のものだったからである。

前川にとって、こうした時代にあつて近代建築とは、何よりも人々の生活を守り、それを支える質を持つものでなければならなかった。一方で、その理想とする近代建築を推進するための建築技術の整備は、戦争による疲弊で滞り、古い体制もその実現を阻んでいた。けれども前川は、

ル・コルビュジエに学び、その可能性を信じた近代建築の方法を日本の地に根づかせ、それを確かな存在へと育て上げていこうと決心する。そして、実直なまでに原則を守りながら、その試みをひとつひとつ積み上げていったのである。また、彼はそうした作業を続ける中で、近代建築がもつ根本的なジレンマ、すなわち、近代以前の建築が風土や歴史に根づいていたようには、時間の中で成熟することがむずかしい、という問題点にも気づいていく。

こうして、前川が追求し遺した建築は、独特なたたずまいと時間をもつて私たちが迎える。それは、晩年に彼自身が述べていたように、写真では伝わりにくい性格のものかもしれない。むしろ、四季折々にそこを訪れ、巡り、たたくことを通して、はじめて実感できる、そんな建築だと思ふ。彼が求めたのは、美術館や劇場といった施設を越えた、心のよりどころとなり得る建築だった。前川の建築を知り、彼のまなざしに重ねて現代の建築と都市の姿を見直し

てみる。そうすると、少し風景が違って見えてはこないだろうか。奇抜さや新しさを競い合うデザイン・ゲームとは異なる、建築本来の力を感ぜないだろうか。前川から見えてくるのは、そんな豊かな世界だと思う。

2008年8月2日

■世田谷区民会館・区庁舎について

作成／松隈 洋

1. 発表誌一覧

・「世田谷区民会館及び区庁舎」競技設計 1957年

日建設計、佐藤武夫、山下寿郎、前川國男の4社による指名設計競技により、前川國男案が選ばれる。技術顧問だった今井兼次、岸田日出刀、武藤清、谷口吉郎が審査にあたったと思われる。

前川國男案の担当者は、ミド同人（田中誠、鬼頭梓、河原一郎、大沢三郎、奥村珪一）
（以上、『国際建築』1957年9月号）

・「世田谷区民会館」計画案（『建築文化』1958年6月号）

：鬼頭梓「区民会館の設計で考えたこと」、計画案模型写真などを掲載

・「世田谷区民会館」1959年竣工

担当：ミド同人 大沢三郎、鬼頭梓、河原一郎

協同：ミド同人 田島敏也、奥村珪一、横山錠司

構造：横山建築構造設計事務所 加々美孝春

坪井善勝研究室 市川大造、中村昭雄

音響：渡辺研究室 石井聖光

舞台：穴沢喜美雄

設備：ミド同人 寺岡恭次郎、高橋重憲、新雅夫、井上茂雄

現場：寺島幸太郎、奥村珪一

施工：大成建設

（以上、『新建築』・『建築文化』1959年7月号）

・「世田谷区役所計画案」（『新建築』1960年1月号）

：鬼頭梓「区民のための区役所」、計画案模型写真などを掲載

・「世田谷区役所」1961年3月竣工

担当：大沢三郎、鬼頭梓、奥村珪一、南條一秀、加々美孝春、高橋重憲

現場：寺島幸太郎

施工：大成建設

（以上、『建築文化』・『近代建築』1961年5月号）

・「世田谷区第2庁舎」1969年竣工

担当：横山錠司、大字根弘司、寺岡恭次郎、高橋重憲、新雅夫、井上茂雄ら
（『SD』1970年11月号掲載）

2. 配布資料

①鬼頭梓「区民会館の設計で考えたこと」『建築文化』1958年6月号

②奥村珪一「コンクリートで空間を創る」『新建築』1960年7月号

今や自然は消滅し、人々は密集しながら孤立している。

私たちが、世田谷区民会館の背景としてみてきたことは、かつての武蔵野の自然と、そこにくりひろげられていた人々の有機的な生活社会とが、次第に崩れて、今は谷も岡も埋めつくす延々と連なる小住宅と、そこではもはやそれぞれの家族は孤立し、何らの有機的な連因や、人々を共同につなぐ社会の連帯意識を失ったただの東京の寝場所しか存在していないことを示してくれる。

東京が巨大な村落であるといわれているように、それは一つの都会としての有機的な内容を失ってしまった。都心が、密集する高層ビルと自動車の氾濫によって、その機能が麻痺し始めている時に、その郊外の住宅地は、平面的に無限に拡がりながら、小さな庭と小さな木造住宅によって埋めつくされようとしている。人々は通勤や買物に多くの時間を費やされ、娯楽や休息にまで、電車ののって都心へ、より郊外へとその場所を求めてその混雑に疲れ果てる。上下水道やガスや電気、電話等は、膨大にふくれ上がったその面積を追いかねて、とてつもない延長を持ちながらもしかもなおこれら住宅地では、一応どこでも満足できるのは電気くらいだといった不毛の土地である。その中で人々は狭い殻に閉じこもって、孤独の生活を細々と守っている。

このように無数の矛盾をはらみながら、しかも今の東京には未だ健康な幸福な都会生活へのイメージすら存在していない。そこには、そのようなイメージを育てるような共通の意識、連帯感がそもそも存在していない以上、東京には事実上都市計画が存在しないに等しいといわれるのも当然のことだろう。今は未だ、人々の全体の幸福を科学的に考えるよりは、自分だけの利害打算を追求することによって社会が成立しているのだから。

このような中で、世田谷の区民会館という、本来人々の全体の幸福に連なる筈の公共施設の設計を委嘱されたとき、私たちは強い意欲をいだくと同時に、何を手掛りとしてこの設計を進めていったらよいかに苦しんだ。

1700人のオーディトリウムと、図書館、500人の大集会室、展示室、調理教室、結婚式場、食堂といった多彩な内容をもった区民会館を、区民の文化の中心として、松陰神社の近く、今の区役所の敷地に、新区庁舎と共に計画するというのが、私たちに最初に示されたプログラムであったのである。

東京の郊外住宅地はどんな形で再開発されるだろうか。

現在の世田谷の地に、高層アパートが建ち並び、広い緑と土地の起伏が再び見出されて、人々はそこにコミュニティのセンターをもって健康

な生活をとり戻す、といった姿を空想するのは容易である。建築家がそのようなイメージを提案することはもちろん重要でありむしろ現在極めて必要なことなのだが、ただ私たちは、現在の東京の生活のもっている無数の矛盾とそれに対して動きつつある何ものかを探ってゆくのでなければ、畢竟それは唯の空想に終わってしまうだろうと考えた。そして、逆に、現在区民会館をたてようという一つの事実の中から、その何ものかを探り出してゆきたいと考えた。区民会館を建てることは戦後の一つの流行の上にも思える。大きなものだけひろってみても、大田区、中央区、中野区、目黒区、杉並区等に、次々と建設されて来たとし、文京区も現在計画中であるときいている。これらの動きを流行と考え、あるいは政治家の人気取りである等と考える前に、私たちはこのような一連の動きを支えているものを見出す必要があるだろう。もちろんこの一事だけをもって直ちに住宅地の再開発は動き出しているなどと即断するのは文字通り即断だろうけれども、火のない所に煙は立たないと考えるのも、あながち楽観にすぎるとも言えないだろう。私たちは何が火であるかを、すなわち、さまざまな装いの下にかくされた民衆の姿を見出し捉えてゆく必要があるのである。

現在の、一見全くそれぞれ孤立しているかに見える東京の住宅地の中でも、さまざまな動きは存在している。主婦連などといった大きな組織を持ち出さなくとも、各地に家庭婦人の読書会や小さなサークルが持たれたり、新しい町内会がつくられたりしている。小学校の夏休みなどの校外指導のために、P.T.A.がその場所を探すのに苦労していることも聞いている。働く若い男女が、簡素な結婚式をあげるために、新宿の生活館がどんなに利用されているかは、よく知られている。図書館などで行われる小さなレコード・コンサートも盛んである。また新劇が中野や目黒の公会堂に進出して公演したとき、生れて初めて新劇を見たという人まで含めて家庭の主婦たちで一杯になった。東電が各地に建てているサービスセンターの中の無料の小集会室は盛んに利用されている。杉並公会堂では原木燃禁止世界大会の部会も持たれたし、総評の大会も開かれた。こうした一つ一つの小さい動きの中から、私たちはおぼろ気ながら、新しい市民像、新しい市民生活、新しい連帯意識といったものへの芽生えを見出すことは無理であろうか。そして外では広く、労働者の連帯意識が次第に着実に高まりつつあるのである。

新しい社会がどのような形であるにせよ、それは新しい連帯感に支えられた健康な社会でなければならない。私たちに夢は許されないとしても、また同時にそれへの絶望も許されないだろう。それが唯の空想に終わらないために、私たちは小さな一つ一つの動きを見つめ捉えながら、その上で人間の幸福を目指して、一つ一つの試みをつみ重ねてゆくことが、今の私たちになし得る段階ではなからうか。このような把握と見通しの上で、目に見えるものとしての未来像を描き出すことこそ建築家の重要な任務であろう。

コンクリートで空間を創る

コンクリートで空間を創るということに私たちは大きな希望をたくしていた反面、ずい分と解らない問題をかかえていた。すなわち色や肌ざわりの点から音や熱に関する特性に至るまで、いまだわれわれに身近かな材料としての地位は確立されていなかった。

しかし私たちはコンクリートという素材の安定性を種々の条件から分析して、福島教育会館のオーディトリウムを壁構造の現場打ちコンクリート外壁でつくり、住宅公園晴海高層アパートで打放した架構の空間を住居に取り入れて確かめてきた。そうして今度はより積極的に「コンクリートで空間を創る」というストーリーを設定した。

これはコンクリートが万能の材料ではないことにより、種々の機能においてはより優れた材料が手に入る現在、一歩目的を見失った時は非常に危険な方法となるが、新材料の発達、専門的研究の分化が人間本来の姿とは無関係に建築創造の分野へ入り込んできているので、建築が機能だけで人間に関係するのではなく、より素朴な条件でつくられねばならないと考えたからである。

高い使用価値を生むためのものは、長い時代の使用に耐える自由な素材であることが必要であり、第一にその素材が豊富で安定しているという条件に裏打ちされねばならないと考えて、再び私たちはコンクリートと取組み、そうしてますますコンクリートに対する信頼感を深めている。

月光に輝く打放しコンクリートの陰影、2尺×6尺の木製パネルを組合せた粗面、コンクリートに直接ペンキを塗った壁などもそのエネルギーを感じさせてくれるし、職人の汗の臭いがするほどにわれわれの身近な材料として生きてきたようだ。またプレキャストコンクリートや直接ペンキを塗ったコンクリートブロック化粧積みの壁も予想以上に良かった。

音響的な空間、構造的な形態、種々の問題がうまく解決されたところでよい建築にはなりえない。社会的、技術的、経済的な矛盾を乗り越え、人々に愛される魂を吹き込みえて始めて建物に生命が生まれるものと私たちは考えた。

このオーディトリウムの形は、決して音響的、構造的に自然に決ったものではない。

建築という極めて具体的な創造において、互いに矛盾する無数の要求を、いかに解決していくかという方法や姿勢がまったく無政府状態にある現代において、でき上る建築が百鬼夜行の様相を呈するのは当然であろう。それに関して原理的には同じアイデアから出発し、ほとんど同時に完成した建物、パリーのユネスコ本部の会議場、四国今治の公会堂、世田谷区民会館の3つは大変面白いものを物語っているようである。

新しいディテールを用いて、現代の矛盾を解決していく方法、例えばサーリネンが M.I.T. のオーディトリウムにおいて示した手法、すなわちシェルターはコンクリートシェルによる自由な空間、音響的には高性能のアコースティッククラウドや壁……という方法は、各要素をバラバラに分解して、おのおのを現在考えられる最良の方法で解決し再結合して空間を創造した。が、私たちが今度とった態度は反対に始めからコンクリートが構造であり、構造が空間であり、それが音響的に解決され、天井、壁などを構成するような空間、すなわち色や肌ざわりの点から音響、構造に至るまでのすべてのもので、——機能も材料も——一つの空間を創ろうと努力してきた。

それはコンクリートで空間を創るということが目的なのではなく、今まで人々の生活とは無関係に分化し、数限りない専門の分野の中へばらばらに分解してしまっていた文明を、少なくとも建築の中からだけでも、もう一度統一ある有機体にもどし、人間の複雑な生活と交錯させようと考えたからである。その一つの方法として私たちはコンクリートの形を考えることによって種々の機能を入々の生活の中へ取り入れようと追求したのだ。

子供たちがプレキャストの手摺へよりかかって観劇する姿や、コンクリートの階段やホワイエ、ピロッチィーで遊ぶ子供の姿を見ている時、彼らにとっては、すでにもう、もっとも身近かな、そして安心できる友達のようなコンクリートを見出せる。

私たちの考えてつくったコンクリートの空間はまだまだあまりにも稚拙であり、ようやくコンクリートの造型の初歩的な段階であるに過ぎないが、この子供たちがすくすくと育ち、この建物を十分に利用する頃にコンクリートはどんなにか豊富な表現を私たちに示してくれるだろう。その時にはじめてコンクリートは人々の生活の言葉を語りはじめてくれるにちがいない。

そのような社会で十分価値を発揮できるようにと私たちはこの建物をつくり出したのだ。

(奥村珪一)

区民会館は住宅地の新しいセンターになるだろうか。

区民の文化の中心などという空疎な言葉に酔うことなく冷静に考えれば、区民会館が住宅地の何らかのセンターになるのかどうかは現在未だ全く分らないといった方がよいだろう。センターなどというものが生れてくるのは、その地域社会が一つの有機体となってくるのと同時であろう。私たちはこの区民会館を設計するのに当って、ただ現在の住宅地の中で、何らかの人々の集まれる場所ができればよいと考えたといった方が正しいかも知れない。それは今は上にのべたようなささやかな願いによって文えられているにすぎない。あとはマスコミの機関がこれを利用するくらいではないだろうか。この会館がこれからこの住宅地の中でどのようなリアリティーを獲得してゆくかは今後の問題であろう。住宅地の一つのパブリックスペースという一点から、そしてそれが何によって現在文えられ、どのように将来へ進んでゆくかという一点から私たちの案は生れた。

都心と住宅地とに分割された生活の中で、いま住宅地は映画館以外にはほとんどそれ自身のリクリエーションや文化活動の場所を持っていない。それがどんなに要求されているのかは、上にふれたように新劇が中野や日黒で成功した一事だけからみても判断され得よう。

私たちはまず与えられたプログラムを再編成することから始めた。1700人のオーディトリウムは、新劇や音楽会までも上演可能なような本格的な舞台機構、舞台裏を持つことができるように、客席を固定席 1326席として、できるだけ広い舞台と高いフライとに予算を振りむけた。これは市民の生活の中でのいわば昂揚した場所と呼べるだろうか。人々は期待に胸をときめかせながら三々五々と集まってくる。その地域は比較的広くなるだろう。ホワイトと共に私たちはこれを公会堂部分と名づけた。

大集会室は、むしろ可動間仕切で仕切られた数多くの小さな集会会議室をもつことによって、大小さまざまなサークル、集会、に使用されるだろう。時々ダンスパーティーの場所となるかもしれない。そして図書館、展示室、調理室等々一緒になって、人々の日常生活の延長として、その中へ深く入りこんでゆくだろう。ここに集まってくるのは比較的狭い区域、半径500mから2000mくらいの範囲の住民によって使われるだろうと考えた。そしてこれに結婚式場を合わせて、私たちは公民館部分と名づけた。このような施設は、従って数多く分散して設けることが望ましい。そして現に碓地区と玉川地区にはこの種区民会館の計画が予定されている。

この二つの部分はここでは相互に独立しながら、また相互に関連している。オーディトリウムが頻繁に使用されるようになるまで、あるいはその後もホワイトは

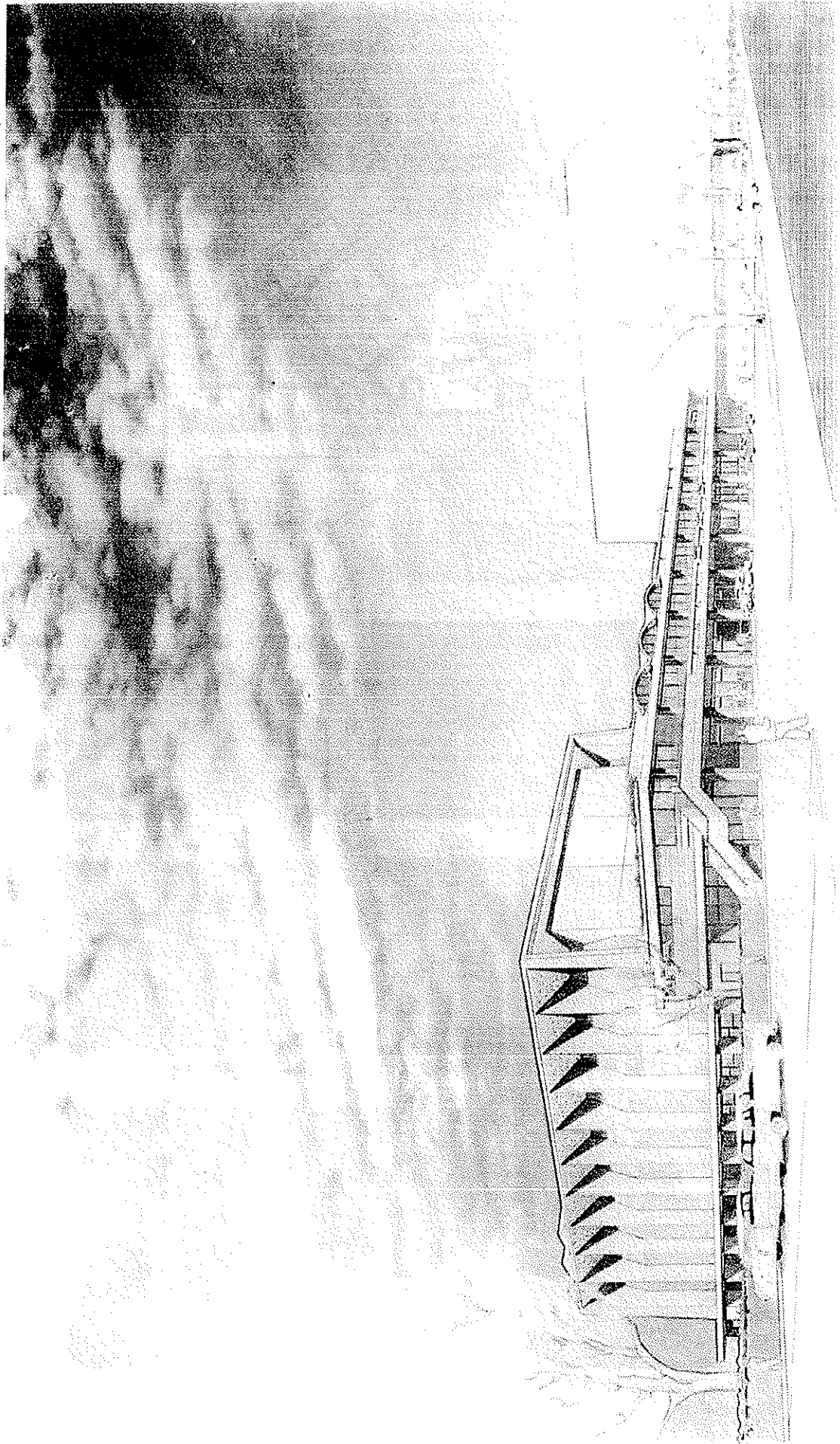
広い展示場、展覽会場としても使われるだろうし、またオーディトリウムが何かの大会等に使用されているとき、公民館部分の集会会議室はその部会や委員会に使用されるだろう。図書館はその視聴覚活動のためにオーディトリウムを使用するだろうし、オーディトリウムに来た人は図書館に立ち寄ってゆくだろう。結婚式場の披露室も時には多くの集会に使用されるだろうし、同時に集会室での大披露宴が、お茶とお菓子で行われることもあるだろう。だが基本的には、その対象とする地域の広さや人数の多少、その生活への結びつき方等から二つの部分にわけて、かつそれを密接に結びつけることを考えた。

こうして私たちは公民館部分を人々に近い所へ、前面道路に沿って配置した。そして公会堂はその後ろへ、ピロティーからつづく広場に面して配置した。前面道路から広場、そして後ろの道路へと人々のスペースは進んでゆく。そうすることによって、住宅地の中にある公共の施設としてどこからもアクセスできるように、裏表のない建物をつくりたいと願った。そして自動車は、ピロティーの一端へアクセスした後、区庁舎の脇へ整理されて、人々はそのさまたげをうけないように考えた。自動車の問題は、より広い地域の計画がなされるとき、同時に今一度考え直さなくてはならないだろう。

そして第2期か第3期の工事のときには、けやきの木に囲まれた場所として、広場にはベンチや子供の小さな遊び場を設け、また自転車の置場をこしらえ、できればここに集まってくるだろう家庭の主婦たちのために小さな託児所を設けて、次第に人々の集まる場所として完成させてゆきたいと望んでいる。武蔵野に点々と存在するけやきの森のように、人々の生活と固く結びつき、それを包む場所として――。

もしも空想をはしらせることが許されるならば、西方、谷をへだてた宗徳寺や世田谷城跡の森、近くの松陰神社の森等と共に、点々とそびえる塔状の高層アパートや低いテラスハウスの間に拡がる緑は、そのまま、この広場へ、ピロティーへと進んで、人々は再び武蔵野の自然の起伏と、遠くに富士山の姿を見出すようになるだろう。

こうして今、私たちは、次の工事としての区庁舎の設計に着手しながら、私たち自身期待と危惧の念につつまれてこの建物の完成するのを見守っている。



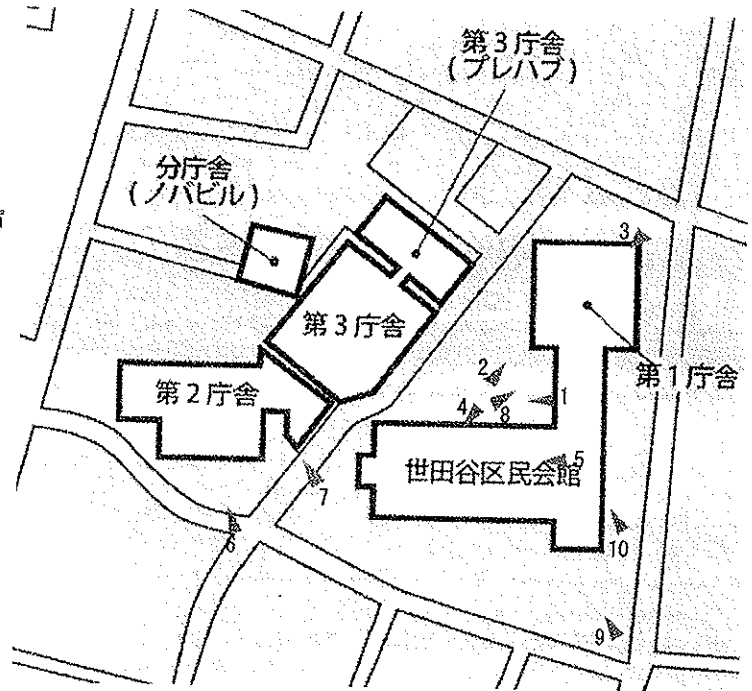
世田谷区役所庁舎 現況配置図

前川國男建築事務所設計による庁舎

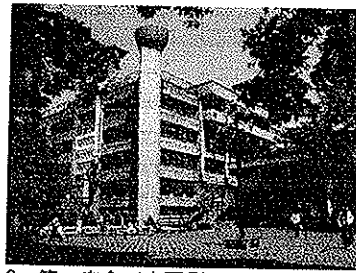
- 区民会館 1957年竣工 RC造 2F+B1F 5,333㎡
- 第一庁舎 1960年竣工 RC造 5F+B1F 8,305㎡
- 第二庁舎 1969年竣工 RC造 5F+B1F 10,518㎡

その他の庁舎

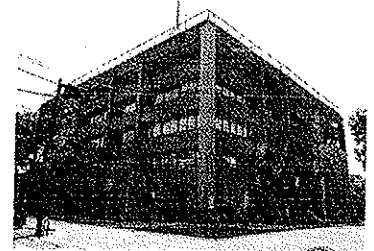
- 第三庁舎 1992年竣工
- 第三庁舎（プレファブ） 1997年竣工
- 分庁舎（ノパビル） 1988年竣工



1 中庭全景



2 第一庁舎（南西側）



3 第一庁舎（北東側）



4 区民会館（ホール）



5 区民会館（ホールホワイトエ）



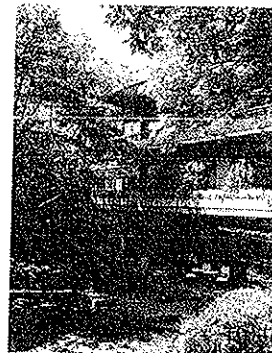
6 第二庁舎（南東側）



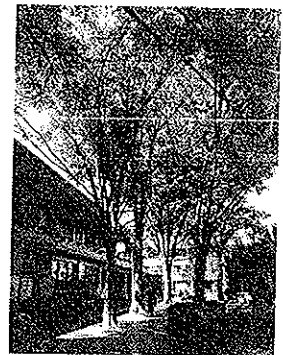
7 第二庁舎（玄関庇）



8 区民会館（ピロティ）



9 区民会館サンクンガーデン

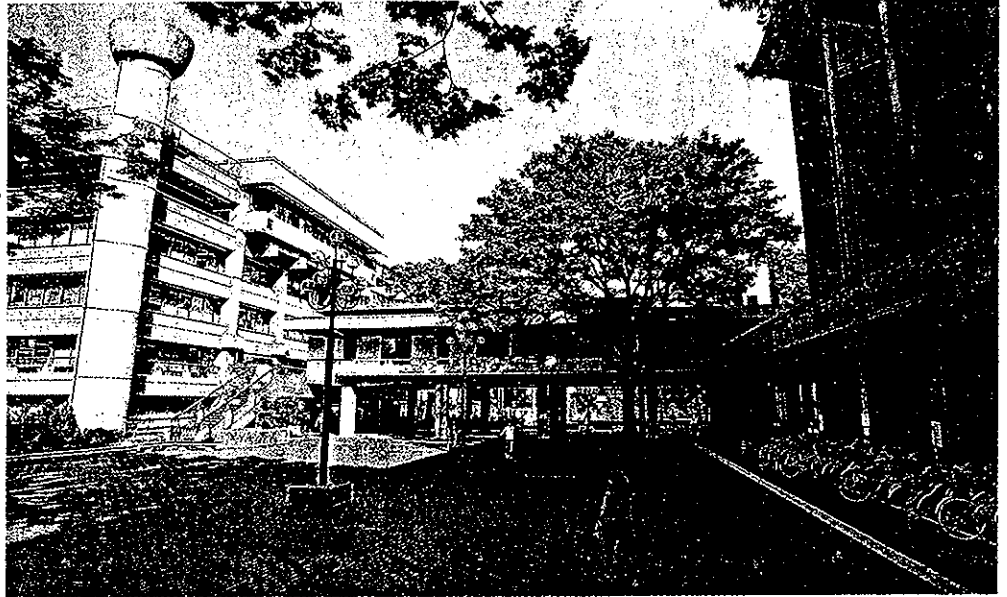


10 区民会館東側広場

前川氏の近代建築 世田谷区、建て替え方針

完成から約半世紀。東京23区の庁舎では最古級となる世田谷区庁舎に、建て替え計画が浮上している。日本の近代建築運動を先導した前川国男氏（1905-86）の代表作の一つとされ、建築関係者は焦りを募らせる。

最古の庁舎 消える？



㊦広い中庭を囲む第1庁舎（後方左）と区民会館㊧
㊦折り紙を広げたような「折板構造」が特徴的な区民会館の外壁＝世田谷区で



ケヤキ並木に囲まれた敷地で、広い中庭をコの字形に囲む庁舎群。区民会館（六九年完成）、第二庁舎（五七年完成）、第一庁舎（六〇年完成）、第三庁舎（六九年完成）が前川氏の

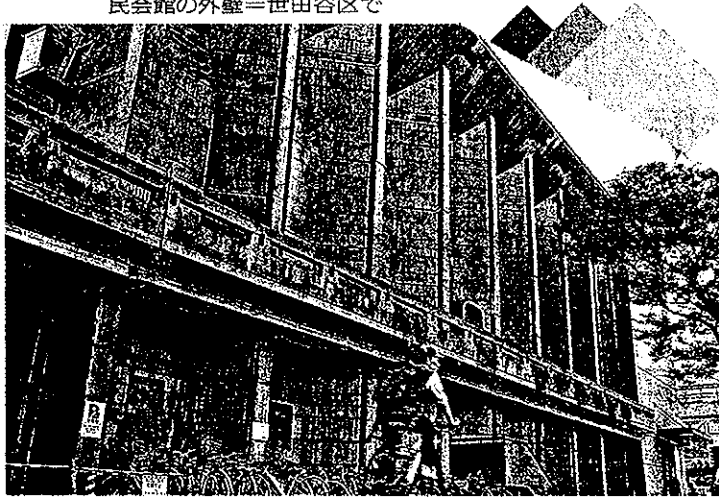
「改修すれば200年持つ」と話す奥村珪一さん＝港区で

作品だ。どっしりとした打ち放しのコンクリートが特徴。壁の表面は木目がくっきり浮き上がり「和」の印象もある。設計に参加した建築家の奥村珪一さん（モ）は「前川先生の指示で世界唯一の造りを目指した」と振り返る。松隈洋・京都工芸繊維

一九九一年の都庁移転と軌を一にして、八〇年代後半のバブル経済期から九〇年代にかけて八区が庁舎を新築した。高層の文京（二十七階）、練馬（二十階）、墨田（十九階）などは「豪華庁舎」と批判も起きた。二〇〇〇年代に入ると、〇三年に目黒が購入した旧千代田生命本社ビルに移転。昨年は千代田が国との合同庁舎を新築。豊島は一四年度を目標に、分譲マンションと

他区も新築相次ぐ

の合築計画を進めるなど、経済性を考えた新たな庁舎整備の流れが生まれている。一方、耐震性不足から建て替えを検討していた品川は、免震工事で築四十年の庁舎の存続を決めた。目黒は、文化勲章を受章した故村野藤吾氏の設計。区は村野氏を紹介するパネルを展示したり、建築観賞ツアーを企画するなど、庁舎の建築的な価値をPRしている。



ないまま、十一月から建て替えに向けての本格的な議論が審議会が始まる予定だ。

明治・大正の洋風建築のように派手な装飾を持たぬ戦後の近代建築は、重要性は理解されにくい。今年に入り、前川氏の作品は、学習院大学の「ピラミッド校舎」や、東京駅前の「旧日本相互銀行本店」が解体された。

松隈氏は「都市景観から戦後の記憶が消失してしまふ。民間が経済性を優先させるのは仕方ないとしても、公共建築の将来は、文化の視点から考えるべきだ」と話す。年末には、区内の建築関係者がシンポジウムを計画している。

文・浅田晃弘／写真・佐藤哲紀、梅津忠之／紙面構成・勝山友紀

「経済性より 文化の視点を」

大学教授（建築史）は「広朽化対策を検討していた区場中心の開放的な空間は公は九月「改修よりも建て替へ」の施設あり方の原点」とえが長期的には安上がり」と評価する。二〇〇四年から庁舎の考た。歴史的価値は考慮され